

# れきしみち

2026.1  
No.139

P2 特集

企画展

## 村中安全

江戸時代の村と人々の営み

P4… 収藏品紹介 河野村へ届けられた幕末の江戸事情

P6… 万葉花ごよみ-その九 椿-

P7… 展覧会関連イベント/冬の催し物案内

P8… 博物館実習報告/市民ギャラリーよりお知らせ

1.文久3年 御触書(本館蔵) 2.天保14年 里村年貢割付状(里町内会蔵)



### 令和7年度 博物館実習 報告



当館では、学芸員の資格取得のために必要な博物館実習の受け入れを行っています。今年度は8名の学生が参加しました。当館の学芸員実習では、博物館、埋蔵文化財センター、市民ギャラリーの多様な文化事業について学ぶことができます。

今年の実習は7月30日から6日間行いました。実習生たちは博物館の仕事や、文化財行政、芸術文化の事業について学びました。なかでも、古文書などの歴史資料や民具資料、考古資料や美術工芸品を取り扱う講義があり、これらの講義では収蔵されている資料を実際に取り扱う実習を行いました。

また、実習中の大きな課題として、常設展示の一部の展示替えがあります。実習前に各自で事前学習をしてもらい、その知識を生かして準備をしていきます。

展示替えではグループを作り、展示構成・資料選定からキャプション作成、展示解説までを限られた時間の中で実践します。今年度は江戸時代の東海道に関する展示と、民具に関する展示の2か所で展示替えを行いました。最終日には学芸員の前で展示解説を行い、指摘を受けたところを修正します。

令和8年度も博物館実習の受け入れを予定しています。意欲的に取り組める実習生の参加を期待しています。



講義の様子



実習の様子

### 令和8年度 博物館実習生の 募集

令和8年度の博物館実習の募集を行います。実習は令和8年7月29日から8月6日(8月1日～3日は休み)を予定しています。安城市歴史博物館のホームページより申込書をダウンロードし、安城市歴史博物館受付までご持参ください。  
申込期間：令和8年2月3日(火)～2月27日(金)

#### 安城市民ギャラリーよりお知らせ

#### 企画展「横山夕葉展 墨跡に込める心の響き」

これまで安城市では地元所縁の美術作家の作品を収集してきました。今回の展示では収蔵作品を含め、長きにわたり安城市の書文化を支えてきた横山夕葉の書の数々をご紹介します。墨跡に込められた美しく深遠な世界をぜひご覧ください。

[開催期間]  
令和8年2月13日(金)～2月28日(土)

[休館日]  
月曜日 ※2月23日(月・祝)は開館

[開館時間]  
9:00～17:00(入館は16:30まで)

[会場]  
市民ギャラリー-展示室D・E

[観覧料]  
観覧無料

[主催]  
安城市・安城市教育委員会

[協力]  
安祥文化のさと地域運営共同体



横山夕葉(天地)

#### 安祥文化のさと

「安祥文化のさと」とは安城市にある松平氏四代50年の居城跡を整備した安祥城址公園一帯の名称です

[全館共通事項]

住所 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地  
休館日 / 毎週月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始(12/28-1/4)

安城市歴史博物館 開館時間 / 9:00～17:00  
TEL:0566-77-6655 FAX:0566-77-6600

安城市民ギャラリー 開館時間 / 9:00～17:00  
TEL:0566-77-6853 FAX:0566-77-4491

安城市埋蔵文化財センター 開館時間 / 9:00～17:00  
TEL:0566-77-4477 FAX:0566-77-6600

安祥公民館 開館時間 / 9:00～21:00  
TEL:0566-77-5070 FAX:0566-77-6062

公式HP、SNSもご覧ください

安城市歴史博物館

URL / <https://ansyobunka.jp/>



企画展

# 村中安全

観覧無料

## 江戸時代の村と人々の営み

令和8年  
2/17(土)～  
3/22(日)

休館日  
毎週月曜日  
※2月23日は開館

開館時間  
9:00～17:00  
(入館は16:30まで)

今からおおよそ四〇〇年から二五〇年前まで、歴史の区分では近世、一般的に江戸時代という時代でした。江戸時代は現在とは違う社会でした。

今回の企画展では、江戸時代の村がどのように成り立っていたのか、また村人がどのように暮らしていたのか、様々な事柄がみられる中でほんの一部ですが紹介していきます。特に村が安全、村人が安心して暮らしていたのかについての展示となります。

### ◆江戸時代のイメージ

江戸時代のイメージは世代や人によって様々だと思いますが、髪型は男が月代(ちよんまげの事)、女が鬘を結い、和服に草履・雪駄などを履いている人々、昔の教科書にある土農工商の身分のある社会、茅葺や藁葺の屋根で木造建築の家に暮らしていた、という感じでしょうか(写真上)。



1 「改正至宝 百姓往來」より江戸時代の身分のイメージ(本館蔵)

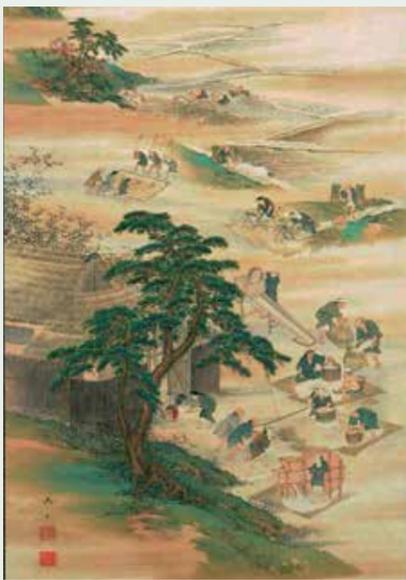
また、村人は村や領地から

わる資料などが残っています。

ここに出てくる領主というのは、江戸時代の日本を治めていた幕府(徳川將軍家)や、幕府から領地を与えられた大名や旗本、寺社などをさします。市域は岡崎藩や刈谷藩、陸奥福島藩の重原領に加え、幕府領や旗本・寺社領など様々な領主によって治められていました。

### ◆村と農業、その他の諸職

市域の村に住む百姓(村人)らの生業の基本は農業でした。村絵図には、田畑が集落付近にあり、加えて水路や道などが確認できます。これらの施設を村で維持・管理し、村人は農作業を行っていました(写真3)。農作業には多くの作業工程があり、米作だけでも田植えから刈入れ、脱穀作業など労力のかかる仕事でした。農業も他の商業・職人と同じように、知識・技術・それに経験が必要でした。作物では米・麦・蕎麦や稗・粟などの穀物類だけではなく、豆類や瓜・人参など様々なものが作られていました。



3 農業図 刈入れから脱穀まで(本館蔵)

ただし、村人は農業に専念してただけではなく、一家を支えるために、様々な仕事をして収入を得ていました。小川村(市内小川町)では幕末の文久二年(一八六二)に二〇人近く商売をしている村人が書き上げられていて、醤油や素麺の製造販売、菓子・木綿・穀類・荒物・古道具、油などの仲買や小売りなどに従事していることがみえます。

転出することができない、あるいは自給自足であったイメージがあるかもしれませんが、近隣の村や町、江戸などにも出ている者もいて、村内には貨幣経済が浸透していました。

安城市域にはこの時代の藩の拠点の城や城下町はなく、東海道は通っていますが、宿場はなく、港町や門前町などの都市的な景観のない地域であると考えられています。実際に資料も残ってなく、おおよそ市域の村々は農業を主体としていました。「身分」で表現するならば村人は「百姓」がほとんどでした。

### ◆村の形 — 村絵図 —



2 天保3年(1832)小川村絵図(本館蔵) 現在の小川町辺り。右に矢作川、中央に鹿乗川が流れています。

安城市域の村は現在の町名となつていないところがたくさんあります。例えば里町は里村、篠目町は篠目村、高棚町は高棚村などです。元の村が分割されて町名となつたところもありま

す(写真4)。小川村には、矢作川沿いに土場(渡し場)があり、鍋方(鍋の修理や販売)や米饅頭・醴酒(甘酒のこと)などが集まる場所で商売している村人がいました。他にも瓦製造や酒造など、周辺地域や江戸へ搬出する業者などもあらわれました。



4 商人一覧の一部(文久2年(1862)「諸願書控帳」より)(本館蔵)

### ◆村の出来事

村の記録や書状などから、村で起きた出来事を見ることができます。村から支配している領主への届出で多いのは盗難被害の報告です。現在の盗難は金や貴重品が盗まれますが、当時の盗品のほとんどが衣類で、古着屋にすぐに買い取ってもらえる利点があったようです。ただし村側も近辺の村々に盗難情報を伝え、犯人確保などに努めました。

また、喧嘩も多く、治安を守るために村役人たちはいち早く当事者に罰を与える手続きなどの解決をはかっていたため、死亡事件などは現在ののような警察は村にはないため、村役人が死者の確認、状況などを把握していました。このような事件性のある事案はすべて領主に報告し判断を仰いでいました。

### ◆村人と余所者

江戸時代の村人は村外に出る機会がたくさんありました。婚姻や養子縁組による移動だけでなく、他の村の裕福な百姓の家に奉公する者、村の領主などの江戸屋敷で

す。市域で一番面積の広がった安城村は、集落の部分に安城町の町名が残っていますが、その他の場所は新たな町名が付けられています。また、村の形はおおよそ現在の町に該当しますが、他の村の中に飛び地があるなど、複雑な形をしていました。明治初年になつてから飛び地は解消されました。

写真2の小川村絵図の左上側に複数の溜池(たらいけ)紺色があります。市域の特徴として、明治十三年(一八八〇)に開業した明治用水ができる以前の水の乏しい碧海台地には、田んぼの水源として多くの溜池が造られていました。また、村人の住む集落は、二か所に、あるいは数か所に集まって形作られています。寺社など現在も残る宗教施設なども描かれています。

### ◆村の仕組み

一つの村が現在の市町村等の自治体のようなもので、庄屋(名主)・組頭・百姓代などの村役人が任命されて、領主からの通達や、村人からの願などを領主に上申することや、法令の遵守などを行っていました。特に重要なのは年貢を納めることで、領主から命ぜられた年貢を村人ごとに徴収し、完納する責任を負っていました。領主が替わっても村の自治や行政能力が村によって保持されていました。

このことを裏付ける書類として、触留帳などの領主からの通達や村人の願を記したもの、村の宗旨を証明した宗門改帳、そして年貢割付状・皆済目録などの年貢に関する書類が現存しています。また、寺社参詣、領主や村の用件で旅行する者がいました。また、村には様々な人があつてきました。棒手振りなどを売りにくる者、座頭や警女など各地を遍歴する者など、中には浪人・虚無僧など金銭を要求する迷惑な人物たちもいましたが、村がその者たちに対応し、村の安全を守っていました。

さらに旅行者で病を発症した、いわゆる行倒れ人の介抱をしたり、その者が帰郷を望んだ場合、通過する村はその人物を運ばなければなりません。東海道沿いの柿崎村では捨子があり、養育してもらえぬ人物を探するなど、道徳的な側面、つまり村の優しさもみられます。

### ◆村の文化と娯楽

村人は農業のみに勤しんでいるだけではなく、所定の時期には村で祭礼が行われ、飾馬や棒の手、巫女舞などを奉納しています。また、市域では村内でグループを編成して花火玉作りを盛んに行っていました。

文化面では、識字率の向上がみられ、地芝居などを村人が興行していました。俳句や、東海地域で盛んになった狂俳などの名手が各地にあらわれ、俳句本・狂俳本が刊行されています。これらの背景には各地に寺子屋が出来、そこで読み書き算盤を習得したことが考えられます。江戸で奉公していた村人から出身の村に向けて現在の生活や社会情勢などを書いた手紙なども残っています。

江戸時代は今とは違う社会でしたが、村の安全を願い、村人たちが自ら行動し、知識・文化をも受け入れ、秩序を維持していました。

今回の展示で江戸時代の村を少しでも理解していただけたら幸いです。

(文責…三島信)

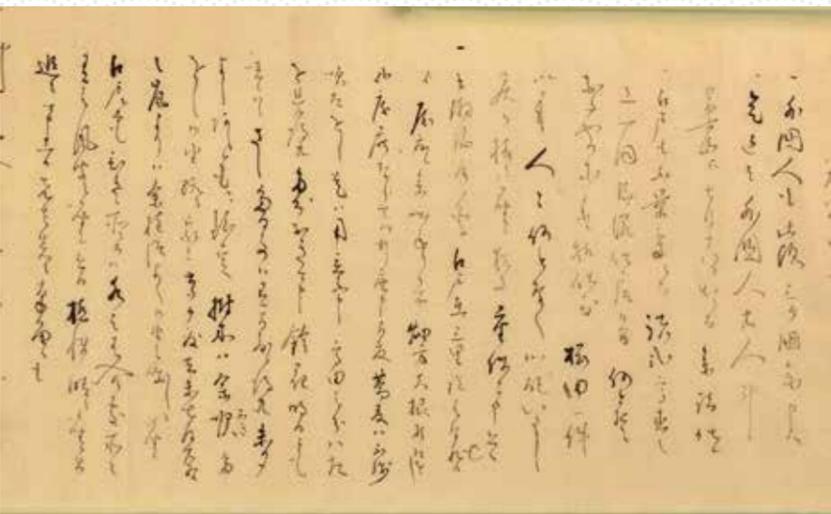
# 河野村へ届けられた幕末の江戸事情

「桜田一件以来、人々何となく心配いたし居候様」と記された書状が当館にあります。桜田一件とは、安政七年（一八六〇）三月に、大老の井伊直弼が江戸城桜田門前で暗殺された桜田門外の変のことです。その事件以来、江戸市中の人々が何となく不安になっていると書かれています。

この書状を書いたのは、江戸に住む、河野村（安城市河野町）出身の来助です。桜田門外の変の起こった同年（三月に改元）の万延元年（一八六〇）七月二十五日に書いたものです。あて名は同じ河野村の太田清重でした。来助から清重や太田一統あての書状が数通当館に寄贈されています。幕末に庄屋を務めていた太田清重の子孫の家に残されたものでした。来助は清重等への書状には概ね「御宗家様・親類中」に挨拶をし、河野村にいる自分の妻子については「お見捨てなきよう」と依頼しています。このことから清重と来助は親類縁者の関係と思われる。ただし、来助については他に史料が残されてなく、身分は不明です。これらの書状から河野村へ届けられた幕末の江戸事情をみていこうと思います。

来助は河野村から江戸へ出て働いていました。来助の書状にみえる「御地頭様」は旗本の小笠原長門守長常です。おそらく来助は小笠原長常の住む江戸屋敷で中間として働いていたのではないかと思われます。

十六日に外国人として初めて富士山に登頂しました。また書状には七月二十四日の大風について三河ではどうかと心配したり、七月二十一日は江戸中の両替商が銀の取替を停止した話が騒ぎになり、町奉行から触が出たことなど記しています。この二年前、日本は日米修好通商条約を結び、アメリカとの貿易が始まりました。まもなくオランダ・ロシア・イギリス・フランスとも同様の条約を結びました。貿易開始と共に金の国外大量流出が起こります。幕府は貨幣改鑄を行い、阻止しようとはしますが、これにより国内では物価高騰となりました。



来助書状2 万延元年（1860）7月 富士登山へ出発の記載部分

中間とは武士に奉公する百姓や町人出身の者をいいます。河野村領主の小笠原氏は碧海郡・幡豆郡に領地がある三〇〇〇石の旗本で、今の岡崎市巾島町に陣屋を構えていました。安城市域では河野村のみが小笠原氏の領地となりました。

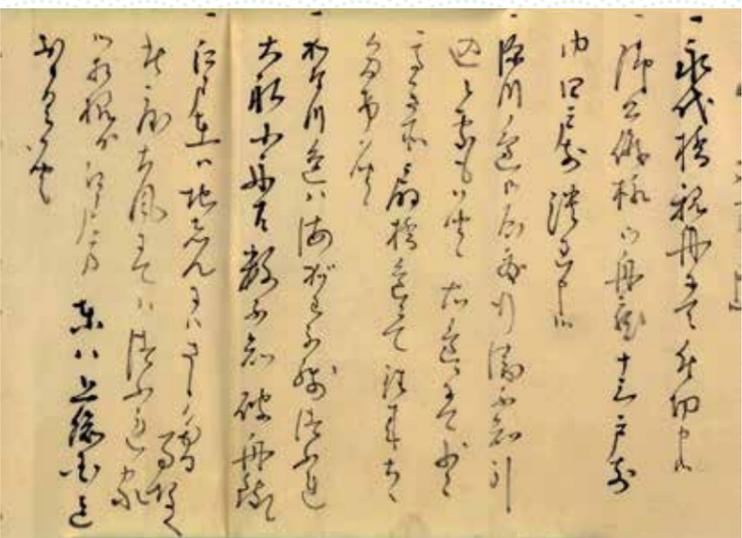
安政三年（一八五六）八月二十五日夜、関東に大風（台風）が襲来し、暴風と高波で江戸周辺は壊滅状態になりました。来助は無事逃げ出し、九月十日付で書状を書いています（書状1）。小笠原長常の屋敷や築地本願寺も潰れ、板屋根の家は残らず吹き飛ばされたとあります。江戸城半蔵御門の松がねじ切れ、永代橋は大船がぶつかり半壊し、幕府の船藏四戸前が潰れたとも書かれています。「江戸より三里程東、行徳と申す処塩入、老人・子供行衛しれ不申、御府内にも死人もおふ」御座候」とあり、江戸より東に約二キロメートルある行徳（千葉県市川市）では海水が流れ込み、老人や子供が流され行方不明になり、御府内（江戸）でも死人が多くでたとあります。「江戸在ハ、地しんにハさしたる事なく、此度大風にてハつぶれ家、箱根より江戸方東ハ上総国迄おおく御座候」とあり、前年の安政二年十月二日には有名な安政江戸地震が起こりました。しかし、来助が記すように、地震ではさしたる被害はなかったが、今回の大風では箱根より東は上総国まで潰家が出てしまったとあります。

「江戸も不景氣にて諸式高直之上、一同難渋仕居候間、何とぞおだやかに参候様仕度、桜田一件：（中略）」とあります。つまり冒頭の一文に繋がります。外国人の登山、不景氣に物価高騰で苦勞している、どうかおだやかに過ごしたいと述べています。

同年九月、領主の小笠原長常が、大目付から勘定奉行に就任しました。十二月十七日付の書状によると、住まいも虎御門外（港区虎ノ門）御役屋敷に移り、恐悅至極だと来助は喜んでいました。「大目付より格ハ御下り候得とも、定て大目付格にて御勤被遊候事は奉存候、天下御用之御立被遊御儀にて三奉行は御智恵者御人選之御事」と認めています。つまり大目付より格は下になります。大目付格として天下の御用のためお役に立たれることです。寺社奉行、町奉行、勘定奉行の三奉行は優れた者を選ぶものです、とある来助の書き方は、誇らしげながらも、少し俯瞰的な感じさせます。この書状は太田清重にあてたものですが、翌年の二月にも清重以下六名に同じような内容で書いた書状もありました。ちなみに小笠原長常は、その後、江戸北町奉行、神奈川奉行、陸軍奉行、海軍奉行を務めました。明治十一年（一八七八）、滞在中の巾島陣屋の代官早川邸で亡くなりました。

文久元年（一八六一）二月十三日深夜、三河では文久西尾地震が発生しました。二十日付の来助の書状には大地震が起こったことに驚き、竹谷村（蒲郡市）や御馬村（豊川市）での被害を知ったと書いています。また、江戸で十三日（十六日の誤り）夕方に地震があったことを記しています。

その他には水道橋・兩國橋などの橋の御小屋（番屋）を役人が御紋付高張提灯を掲げて警護しているとあります。これは横行する水戸浪人を取り締まる



来助書状1 安政3年（1856）8月 安政の大風の記載部分

ためと書いています。来助はここでも「何とぞおだやかに致し度候」と認めています。

続けて米が百文につき四合二勺、油合が八〇文と諸品高値とあります。正月から二月は雪も多く、「イギリス・フランス・ロシア・オランダ・アメリカ・フルイセン・ドイツ国トべて七ヶ国」と開国したため、「高直ト申候得共、全く作違も御座候哉、諸国共々格別違作ト申事も無御座候得共、一行世界広相分不申候」と記しています。これは高値といえ、全く見込み違いもあるだろうか、諸国それぞれ特別に不作ではないはずだが、世の中は広く訳がわからないと書いています。開国した国の中にドイツとありますが、これはポルトガルの間違いかと思われます。

来助の書状は河野村の太田清重や太田一統、村人に届けられました。災害による混乱、開港による物価高や桜田門外後の水戸浪人の横行など、混沌とした幕末の江戸の様子を伝えていきます。また、領主の小笠原長常の役職についても自分の考えを述べています。中間奉公で百姓出身と思われる来助ですが、知識を持ち、文字書きはもちろん、見聞を広め、情報を書き伝えています。

河野村では、江戸での出来事を来助からの書状でも知ることができました。江戸時代の村では、領主からの触や達からの情報だけではなく、村に住む百姓でも、自ら情報を得る様な手段を持って生活していたことがうかがえます。

※史料の句読点や濁点、補遺は筆者により加筆したものです。

（文責：水谷令子）

# 企画展 村中安全

—江戸時代の村と人々の営み—

## 関連イベント

### 歴博講座

古文書から見る  
江戸時代の安城の村々

[日 時] 2月14日(土) 14:00~  
[講 師] 三島一信(本館学芸員)  
[定 員] 60名

当日  
受付



### 関連イベント

#### そば打ち体験会 そば切りを作ろう!

[日 時] 2月8日(日) 10:00~12:00  
[講 師] 杉浦ひろ子氏(安城エプロン会)  
[定 員] 12組(事前申込み先着順)  
[参加費] 500円

申込 1月18日(日) 9:00~電話受付

#### わらじ作りワークショップ

[日 時] 2月22日(日) 10:00~16:00  
[講 師] 角谷俊卓氏 ※途中、昼休憩あり  
[定 員] 5名(事前申込み先着順)  
[参加費] 300円

申込 2月8日(日) 9:00~電話受付

開催期間  
2月7日(土)~3月22日(日)

#### 歴博福よせ雛

企画展「村中安全」に  
ちなんだ福よせ雛を  
開催します。



#### 村中安全クイズ

村中安全のクイズに  
挑戦しよう!

参加  
無料

#### わらじ作りミニ体験

[日 時] 2月22日(日) 10:00~12:00、13:00~16:00  
※体験のみ・わらじの持ち帰りはできません

参加  
無料

### 和菓子職人に教わる 春の和菓子作り講座



[日 時] 2月24日(火) 10:00~12:00  
[講 師] 清水崇司氏(両口屋菓匠三代目)  
[定 員] 20名(事前申込み先着順)  
[参加費] 2,000円(材料費)  
[申 込] 2月10日(火) 9:00~電話受付

### 「れきはく学芸員」になって 「イチ推し展示品」を紹介しよう!



[日 時] 2月28日(土) 10:00~16:30、  
3月7日(土) 10:00~15:00 全2回  
[定 員] 8名(事前申込み先着順)  
[対 象] 小学4年生から高校生  
[参加費] 無料  
[申 込] 2月7日(土) 9:00~電話受付

### きもの帯でつくる リメイク帯バッグ講座



[日 時] 3月1日(日)、3月8日(日) 全2回  
各回ともに10:00~12:00  
[講 師] 杉浦菜穂子氏  
(愛知学泉短期大学 生活デザイン総合学科)  
[定 員] 12名(事前申込み先着順)  
[参加費] 5,000円(材料費込)  
[申 込] 2月11日(水) 9:00~電話受付



令和8年

3月21日(土)

10:00~15:00  
場所 安祥城址公園  
(※雨天中止)



殺陣ショー、マルシェの開催など  
和にちなんだ催しを開催します

※定員数・開催方法や日時・内容等を変更する場合があります。最新情報はHPにてご確認ください。  
※お客様よりいただいた個人情報は、本事業のご案内のみに活用させていただきます。

申込み・問合せ 歴史博物館 TEL:0566-77-6655

# 万葉 花ごよみ

城址公園

その九「椿」



安祥城址公園に咲く万葉集ゆかりの花や植物たちを紹介していきます。

海石榴油(椿油)の記述がみえ、奈良時代には作られていたとされます。万葉集には椿を詠んだ歌は九首あります。

巨勢山のつらつら椿つらつらに

見つつ思はな巨勢の春野を

(坂門人足)

冬から春にかけて咲く椿は、寒い季節に明るい彩りを添える花として親しまれています。木偏に春と書く椿は、文字通り新年に春の訪れを告げる花木です。新暦の現代では冬の花という印象がありますが、かつては正月(現代の二月の節分の前後の旧正月)頃に咲く新春の花とされてきました。椿はツバキ科ツバキ属の常緑樹で日本原産とされ、本州以南の各地で自生してきました。万葉集では「椿」の字の他に「海石榴」「都婆伎」「都婆吉」とも記されています。また椿の実から採取した椿油は、食用油や髪油としても使用されてきました。正史『続日本紀』には宝亀八年(七七七)に



「巨勢山にたくさん連なつて咲いている椿をよくよく見てほめたたえましよう、素晴らしい巨勢の春の野を」この歌は大宝元年(七〇二)九月、持統上皇が紀伊国(和歌山県)へ行幸する際に、巨勢(奈良県御所市)の山路で詠まれた歌とされます。九月という秋の季節に春を思いはせて詠まれたものといわれますが、実はこの歌にはもともと本歌があります。それは「川の上のつらつら椿つらつらに、見れども飽かず巨勢の春野は(春日蔵首老)という歌です。この歌こそ、春の巨勢山で見た椿を喜びたたえて詠まれたものとされます。行幸の一行がこの歌に思いをはせるように詠われたのが、最初の一首と考えられています。「つらつら椿」とは繁つて連なりあつた椿の花をあらわしたものです。また、「つらつらに見つ」のつらつらは、よくよく、つくづくという意味です。「つらつら椿つらつらに」という言葉は何か響き合う、春を喜ぶような表現に思えます。

あしひきの八つ峰の椿つらつらに

見とも飽かめや植ゑける君

(大伴家持)

「幾重にも重なる山の峰々に咲く椿のように、じつくりと眺めても飽きることはないでしょう、この椿を植



えたあなたは」この歌は、大原真人今城の宴に招かれた大伴家持が、館の庭に咲く美しい椿を賞賛した時に詠んだものです。椿とこれを大事に育てた今城を含めて、ほめたたえたものと思われまふ。歌を詠んだ家持は、当時兵部省の職員である兵部少輔(従五位下相当)でした。宴の主人である今城も同じく兵部省の兵部大丞(正六位下相当)という関係でした。ただ、それだけではなく、今城の母は家持と同族の大伴氏といわれ、二人は歌を交わし親交を重ねる間柄でした。「見とも飽かめや」は、見ても飽きないほどという感嘆の表現で、万葉集にはよくみられます。またさらに「つらつらに」と重ねて絶賛しているのには、二人の仲の良さも感じられます。このつらつらは「首目の「つらつら椿」をも連想させます。